小金井市男女共同参画情報誌

# かたらい

56号
2022 秋

## 企画 「LGBTQ+（プラス）」～それぞれの性～

p2 鈴木 茂義さん インタビュー
**「これまでの活動を振り返って」**
上智大学基盤教育センター 非常勤講師　鈴木　茂義さん

p4 丸山 まさよし さん インタビュー
**「決めつけないことの大切さ」**
NPO法人　共生社会をつくる
性的マイノリティ支援全国ネットワーク
理事　丸山　まさよしさん

p6 **ジェンダー探求**
寄稿
**「仕事の歴史を振り返る
～歴史にみるジェンダー～」**
国立歴史民俗博物館 名誉教授　横山　百合子さん

p8 **小金井で働く**
**「ものづくりで、人と地域を繋ぐ」**
「ヤマコヤ」やまさき　薫さん

p10 **育児・介護休業法が改正されました**

企画

# 「LGBTQ+（プラス）」～それぞれの性～

前号、前々号では、「生物学的な面からの性の多様性」を企画テーマとして、性ホルモンや遺伝子・脳と、性の多様性との関わりを毎号紹介しました。今号では、LGBTQ+（注1）の当事者として、講演等幅広く活躍されている、鈴木茂義さんと丸山まさよしさんのお二人にお話を伺いました。

## 「これまでの活動を振り返って」

**鈴木　茂義さんインタビュー**

上智大学基盤教育センター非常勤講師。東京都立特別支援学校非常勤講師。プライドハウス東京理事。常設のLGBTQ+センター「プライドハウス東京レガシー」スタッフ。LGBTQ+と教育について考える虫めがねの会の代表。自治体の相談員。元公立小学校主任教諭。専門は特別支援教育、教育相談、教育カウンセリングなど。
1978年茨城県生まれ。文教大学教育学部卒業。20年の小学校教諭を経て現在に至る。教育研究会や教育センターでの講師経験も多い。
LGBTQ+や教育に関する講演活動を行い、性の多様性やより良い「生き方」「在り方」について参加者と共に考えている。

### ◆これまでの活動について

小学校の先生を二十年していました。現在は知的障害の子どもたちが通う特別支援学校の非常勤講師、上智大学非常勤講師、LGBTQ+と教育について考える任意団体「虫めがねの会」を主催しています。その他にも、各自治体のLGBTQ+に関する居場所づくり、相談員をしています。

私自身もゲイの当事者で、そのことを社会的にオープンにして学校の仕事や外部の仕事、人権尊重を大事にした活動をしています。

### ◆「虫めがねの会」について

当事者の先生や、当事者じゃないけれど、LGBTQ+に関心がある先生、当事者でも先生でもないけれど、教育について語りたいという人たちが集まる会です。

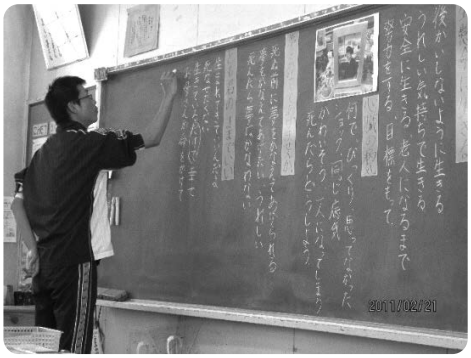
会が始まった当初は当事者の先生たちだけの閉ざされたグループでした。お互いの職場での実践を交流したり、当事者の教員としての苦労や喜びなどを仲間内で話し合ったりして、ピアサポート（同じ悩みを持つ人同士で支え合う活動）の部分が大きかったです。

活動を続けていくうちに、色々な人たちから多様な性を話題として仲間づくりをしたいという声が多くなって来ました。途中からどなたでも参加できる会にして、コロナ前は月に二回、公共の施設で勉強会、交流会を実践してきました。参加者は十代から七十代くらいまで、男女、ジェンダー、セクシュアリティ、世代、職業問わずいろいろな方が参加しています。

### ◆今まで話題になったこと

多様な性、LGBTQ+についてどのように子どもに教えてきたかの実践報告や、当事者の教員がこれまでどのように社会の中で人生を過ごしてきたかのライフストーリーを語り合う回、包括的な性教育の指導を学校の中でどう進めていくかなどがあります。参加した人たちが一番話したいことを持ち寄って、その場でテーマを決めることもあります。

LGBTQ+の子どもたちをどのようにサポートするかに関しては、個別のサポート、相談しやすい体制をどう作るか、実際にカミングアウトされたとき、どういったコミュニケーションが取れるかを話しています。まとめて考えるのではなく、個々のニーズを把握して相談に当たるのが大切だねと話し合っています。強さのない、可能性のない子どもたちはいないです。マイノリティだけに注目するのではなく、その子の良さ、強さを実際に発揮できる取り組みが大切だと思います。



### ◆カミングアウトのきっかけ

今から七年前、小学校五年生と六年生を担任していたとき、やんちゃな子どもたちに「素直であれ」「誠実であれ」「正しく生きよう」とよく話していました。自分自身はゲイということを隠していて、ふと自分自身の矛盾に気が付きました。そのときに、

社会で生活しているＬＧＢＴＱ＋当事者の皆さんを写真で応援する「OUT IN JAPAN」というプロジェクトに出会いました。もしかしたら、自分が社会的にカミングアウトすることによって、子どもたちや大人、社会の役に立てるかもしれないと思ってカミングアウトしたのがきっかけです。

## ◆周りの反応はどうでしたか？

教え子や、かつて関わった子どもたちは非常に驚いていました。保護者や、地域の反応が怖かったけれど、ネガティブな反応はほとんど無く、勇気がある行動を褒めてくれました。「何かしらコミュニケーションは取りたいけど、ＬＧＢＴＱ＋について学んだことがないから、どのように話せばいいか戸惑った」「同性が好きなことの何が問題なの？」「子どもや保護者としっかりコミュニケーションを取れていたので、ゲイであろうとなかろうと関係ない」などの声がありました。

## ◆カミングアウトについて

現在の日本の状況では、カミングアウトすることが安心安全な状況になっていないので、相当なリスクを負うことになると思います。カミングアウトすることが正しいわけでも、正義でもなく、カミングアウトしないことが悪いわけでは決してないです。大切なのは、カミングアウトをするしないに関わらず、その決断と行動が尊重されることだと思います。その中でなぜ私がカミングアウト出来たかというと、このまま誰にも話さないで、不都合なことが多いけど我慢しながら生きるか、チャレンジして自分の人生を打開するか、二つの分かれ道があり、自分を隠すことから自分を解放して、人生を切り開いてみたいと思ったからです。私の場合は傷ついたとしても、それを受け止めて、頼ることのできる仲間の存在という保険があったのでカミングアウトできました。

## ◆カミングアウトされたとき、どのような対応をしたらいいと思いますか？

ＬＧＢＴＱ＋に関わらず、トピックが変わればカミングアウトする側にも、される側にもなります。そのときに自分がどうして欲しいかを考えると、自ずとカミングアウトされたときのことが見えてくるのではないかと思います。よく、して欲しいことばかり聞きがちですが、以前六年生のクラスを担任していたときに、「これは絶対にして欲しくないということを覚えていて欲しい」と言われたのがとても印象的でした。して欲しいことをすることも大切だけど、して欲しくないことはしないということも大切だと感じています。

## ◆プライドハウス東京レガシーについて

ＬＧＢＴＱ＋に関するポジティブな情報発信をしたり、困りごとがある人が何か情報を手に入れたり、相談できたりする場所です。全国のイベントや相談窓口のチラシ、ＬＧＢＴＱ＋、ジェンダー、セクシュアリティに関する図書コーナーがあります。ＬＧＢＴＱ＋フレンドリーなスタッフとのお話もできます。来館されたお客様のニーズに合わせて、本をおすすめしたり、紹介もしたりしています。今後は対面のイベントも充実させていきたいと思っています。コロナ禍では、YouTube を中心とした動画コンテンツを作成したので、東京以外の地域にもレガシーの雰囲気を感じていただけていると思っています。

## ◆今後してみたいこと

一つは婚姻の平等を実現するための活動をしていきたいです。その一つがレガシーを安定的に運営していくことだと思います。当事者、アライ（注２）の方と一緒にチームで運営していますが、さらに広げていきたいと思っています。もう一つは、出張授業を東京だけではなく全国各地で行い、全国の子どもたちと学びを深めたいと思っています。

先端科学技術研究センターの熊谷晋一郎さんの言葉を借りますが、「真の自立とは依存先を増やすこと」が大切だと思っています。これからの変化の激しい時代では一人の力で頑張ることも大切だけど、安心安全な場所、人を頼りながら生きていくことが豊かさに繋がると示してくれているような気がします。

お互い様の取り組みがさらに一層広がると、楽しく豊かに生きられるのではないかと思います。自分が豊かに生きるのも楽しいけれど、周りの人や、好きな人たちが豊かに生きられるのも、自分の喜びになるのではないかと思っています。そんな依存先をどんどん作っていきたいと思っています。

注１・レズビアン、ゲイ、バイセクシャル、トランスジェンダー、クエスチョニング、クィアの頭文字と、それ以外にも、たくさんの性のあり方があることから包括的な意味を持たせるために＋を付けた、性的マイノリティの総称の一つ。

注２・ＬＧＢＴＱ＋を理解し支援するという考え方やその考えを持つ人。

## 取材を終えて

ＬＧＢＴＱ＋に関わらず、発言や行動するときに自分だったらどう感じるかなど、一度立ち止まって考えることが大切だと思いました。安心安全な場所で心から笑顔になれる人たちが増える社会を目指す鈴木さんの瞳はとても輝いていました。（櫻井）

# 「決めつけないことの大切さ」

**丸山　まさよしさんインタビュー**

NPO法人 共生社会をつくる性的マイノリティ支援全国ネットワーク理事、「lag（ラグ）」代表。
福岡県出まれ、ノンバイナリートランスジェンダー（注１・２）男性。
子どもの頃から、性別の違和感と女性への恋愛感情を「ないもの」にして苦しんだが、30代に入り自らの性自認と性的指向を受け入れ、生きている実感を少しずつ取り戻す。都内男女平等参画センター勤務を経て、自治体などでのLGBTQ・性的マイノリティ相談支援に携わる傍ら、2016年より三鷹市、武蔵野市を中心にLGBTQ当事者と理解者の居場所づくり、トランスジェンダーで保護者のピアサポートや啓発活動を続ける。現在は男性として生活し、戸籍上女性同士のパートナーと暮らす。

## ◆これまでの活動について

ＮＰＯ法人共生社会をつくる性的マイノリティ支援全国ネットワークに所属し、自治体でのＬＧＢＴＱ相談支援、交流会などのピアサポート、啓発などの活動に携わっています。

また、二〇一六年に武蔵野市を中心に「lag」という居場所づくりや、活動を始めました。性的マイノリティの方や、性の多様性を理解したいという方との交流会をしています。

## ◆「lag」を始めたきっかけ

周囲から女性という認識をされ、そこに無理やり自分を合わせ、感情を封じ込めてきて、自分自身ではいられない孤独感がありました。

そんななかでＬＧＢＴＱの当事者交流会に行くと安心して自分自身でいられ、息ができました。最初は自分のニーズからだったのですが、性的マイノリティ当事者がお互いに自分らしくいられる時間をもちたくて居場所づくりを始めました。

それから子ども向けやその保護者向けに『にじいろ絵本カフェ』という、テーマに沿った絵本の読み聞かせや感想をシェアするワークショップを継続して行っていました。安心して安全に話せる空間だけでなく、やはり外にもちょっとずつ存在を知ってもらいたいという気持ちから行動に出たのだと思います。

## ◆ワークショップの参加者の反応

「いろいろな家族があるということがもっと知られて欲しい」、「子どもと一緒に考えたい」など肯定的な感想が多かったです。

子どもの方が大人よりも心でわかっている部分があり、同性同士の結婚についてとか、トイレはどうするのか？など社会的なこともいろいろ考えているなと思いました。

## ◆性の多様性について子どもたちに伝えるには？

私自身、出産を経て子育てしているとき、息子には徐々に話したり、いろいろな家族の絵本を読んだりしました。多様な性を生きる人が身近にいて、ただ自然体で接することも大切だと思います。

しかし集団に入っていくと「女の子らしさ」「男の子らしさ」という、周囲の認識があるとはじかれてしまうこともあるように思います。

例えば割り当てられた性別が男の子で、プリンセスが好きだというと、冷やかしが起きることはあるので、「好きなことやもの、色などはそれぞれに違っていてもおかしいことではないし、素敵なことだね」と伝えられるといいですね。

絵本で、「こういうものを選んでいいんだ」、「こういう家族があるんだ」と認識し、少しずつ身近に感じられていくのかなと思います。

また、もし「女の子らしく」「男の子らしく」という無意識の色眼鏡で、お子さんの好きなものが周囲の人に否定される場面に出会ったときには、「私は素敵だと思う」と誰か味方が一人でもいれば、少しでも心が楽になるのではないかと思います。

もし言えそうな間柄なら「それはジェンダーハラスメントと言って、男の子だからこう、女の子だからこうと、『〜らしさ』や『役割』で縛りつけてしまうのは暴力だよ」と伝えるのも親切かもしれません。

## ◆活動の中での自分自身や周囲の変化

「lag」の活動を始めた頃は関心を持つ人も少なかったですし、ＬＧＢＴＱや多様な性について発信するのが怖いと感じることはありました。気持ち悪いと言われたこともあります。

だけど交流会などを通じて自分でいる時間を増やしたり、身近な支援者の方に相談したりするなかで、少しずつ呼吸ができるようになりました。

女性として生きてきて、性別が違うという感じだったので、ＳＯＳの意味でどこで

もカミングアウトしていた時期がありました。「名前はこう呼んで欲しい」とか「お母さんと呼ばないで」とか必死に伝えてきました。私の場合は、性別を移行して、名前も変わり、自分自身と一致して生きられるようになり、安心して過ごせる場所が増えてからは、こうした形でカミングアウトしなければならない場面は少なくなりました。今は自分自身と一致して以前より穏やかな時間を過ごせています。

今まさに悩んでいる方はたくさんいるので、話を聴いて、声として届けていくというのはこれからも続けていきたいと思っています。

周囲の人も肯定的な関心を持ってくださる方が増えてきたと感じます。

## ◆以前より「LGBTQ」などの言葉が広まったことで、弊害が生じていると思われること

偏見や差別がなかったことにされてしまわないためにも、今はLGBTQなどの言葉は必要な時期だと思います。

ただし、存在が知られていくことで「あの人そうなんじゃないか?」と詮索されたり、カミングアウトしたら勝手に話されてしまったりと、今まで見えなかった分の傷や痛みが増えることもあるので、安心して相談できる場所やサポートが必要だと感じます。

また、何もしないと抑圧された状態が続いてしまうことにもなりかねないので、適切な情報を伝えていくことも大事なことだと思います。

## ◆日常生活の中で性別を意識すること

性別を移行する前は、性別欄があると「親」と書いたり「父」と書いたりしていました。当時は体の性別を知られることに恐怖を感じていました。小児科で初めて「お父さん」と呼ばれた時は、涙が出るほどほっとして嬉しかったのを覚えています。

病院などで保険証を渡す際や、性別欄が書いてある書類を見た時には、息が詰まることもあります。公衆浴場などには入れないので、性別を意識させられます。

## ◆子育ての中で大変だったこと

子育てそのものの大変さに加え、「ママ」と呼ばれることや、女性として認識されていることに苦しさがありました。

当時は体の性別を知られる恐怖感があり、わざわざ遠くの公園で遊んでいました。トランスジェンダーで同じように出産経験がある男性やノンバイナリーの方も少なくないです。LGBTQの方との繋がりは今でもかけがえの無いものです。

## ◆性の多様性に関するおすすめの絵本

『くまのトーマスはおんなのこ』(ジェシカ・ウォルトン作、ポット出版プラス)です。トランスジェンダーのくまの女の子の物語です。友だちに自己開示をしようと悩んでいるシーンにドキドキするのですが、周りが男の子であっても女の子であっても、そのまま友だちであることには変わりないと言って最後のシーンでは友だちが増えているんです。すごく印象的で温かいお話です。

## ◆東京都のパートナーシップ制度の取り組みについて

今は戸籍上同性のパートナーと暮らしています。今年の五月に、住んでいる地域でパートナーシップ宣誓をしました。結婚のように法的効力はないけれど、今までは何かあったときに一緒にいられないかもしれないという不安がありましたが、緊急時でもパートナー、家族として扱われるという安心感は増えました。

東京都内の自治体との連携についても書かれていたので、何かあった時により安心だなと思いました。他の地域でもどんどん広まって欲しいなと思います。

## ◆挑戦したいこと 社会に期待すること

今はピアサポートに関わっているのですが、地道に積み重ねていきながら発信の活動と丁寧に繋げていきたいと思っています。

それから性的マイノリティ当事者や、関心のある人の居場所づくりも続けていきたいです。

同じような体験をされた方の冊子も作っているので、そちらも続けていきたいと思っています。

学校教育などでも性の多様性をもっと伝えられる機会が増えて欲しいです。安心してここにいて大丈夫と寄り添い、肯定的に発信してもらいたいと思います。

注1・「ノンバイナリー」とは、自分の性自認・性表現が、男女のいずれかにはっきりとあてはまらない人。

注2・「トランスジェンダー」とは、生まれた時に割り当てられた性別に違和感があり、異なる性を体験している、生きている、生きようと望む人の総称。

## 取材を終えて

穏やかな口調で、どんな質問にもとても丁寧に答えてくださる丸山さん。人としての在り方そのものが、すごく素敵な方です。

誰もが安心して、お互いを尊重し合う社会になるために、まずは自分自身を大切にし、身近な人との関係をより良くしていくことが大事だなと感じました。(秀澤)

# ジェンダー探究

## 寄稿「仕事の歴史を振り返る ～歴史にみるジェンダー～」

**国立歴史民俗博物館名誉教授　横山　百合子さん**

日本近世史、ジェンダー史を研究。神奈川県立高等学校教諭、千葉経済大学経済学部教授などを経て、国立歴史民俗博物館教授。2021年3月退職。
2020年国立歴史民俗博物館企画展示「性差（ジェンダー）の日本史」プロジェクト代表。博士（文学）。
著書に、岩波新書『江戸東京の明治維新』(2018年)など。

「女性ならではの繊細さがすばらしい」とか、「女房役の支えがあってのことだ」といった言葉は、現在でもしばしば耳にすることがあります。これらは、細やかで優しい〝女らしさ〟のイメージや、妻は補佐役として夫を支えるものだという考え方から生まれた言葉です。しかし、歴史を振り返ってみると、男らしさ、女らしさの規範や夫婦のあり方はもちろん、政治上の役割や職業における男女の区分も、時代によってまったく異なっていることがわかります。

ここでは、江戸時代から今日までの暮らしや仕事の歴史のなかで、男女がどのように区分され、そこで人びとがどう生きたのかをご紹介し、ジェンダーの視点から、歴史を知ることの意義を考えてみたいと思います。

### 女の髪結（かみゆい）は許されなかった？

二〇二〇年に、私の勤務先の国立歴史民俗博物館では、企画展示「性差の日本史」を開催し、江戸時代の男女の髪結を取り上げました。図1は幕末の男の髪結の写真です。

髪結は、丁髷（ちょんまげ）や現在日本髪と呼ばれるような、髪を結う仕事です。しかし、江戸時代には、同じ髪結でも、男性と女性ではその扱いがまったく異なっていました。髪結は、都市の下層の人びとの職業でしたが、丁髷を結い月代（さかやき）を剃る男の髪結は、幕府にも認められた合法の仕事です。男の髪結たちは、仲間を作り、非常事に町奉行所の大切な書類――今で言えば公文書を持ち出して守ったり、小伝馬町の牢屋の囚人の髪を切る役目を負ったりする代わりに、仲間以外の者の営業を許さず、営業独占の特権を幕府から認められました。

これに対して、一八世紀半ば頃に登場したといわれる、女の髪を結う女性の髪結は、江戸時代の終わりまで非合法の職業でした。彼女たちは、櫛を小脇に抱えて客の家を訪ねて結ったり、風呂屋で湯上がりの客の髪を結ったりして結髪（けっぱつ）という新たな需要に応えていき、その数は、幕末には一四〇〇人程にのぼったと言われます。女髪結は、取締りの緩やかな時代には、見て見ぬ振りのお目こぼしで営業を行っていましたが、幕府が質素倹約を強調した政治改革の時期には厳しい取締りを受けました。天保改革に際しては、女髪結自身はもちろん、女髪結の親も娘のしつけが悪いとして牢舎や手鎖、罰金などの処罰を受け、結ってもらった客も逮捕されたのです。

余談ですが、このとき、女髪結を徹底して取り締まれと主張したのが町奉行鳥居耀蔵です。これに対して、女髪結は貧しい女たちで、厳しく取り締まるのはかわいそうだから、目立つ女髪結だけ捕縛すべきだと主張したのが、遠山の金さんこと北町奉行遠山景元でした。当時、遠山の金さんに人気があったのは、そんな理由もあったのです。

図1　式亭三馬「柳髪新話浮世床」より
男性の髪結床の賑わいが、うかがえる
（国立国会図書館所蔵）

それにしても、幕府は、なぜそれほど女髪結を厳しく取り締まったのでしょうか？もちろん、贅沢な風俗を取締ることは重要な目的でしたが、女性に対してだけ結髪の仕事を許さない理由を、幕府は一度もきちんと説明していません。一般の町人男性は、毎日、あるいは一日おきには髪結に行くのに、女性に対しては、「自分で髪を結うのが女のたしなみである」としかいわず、たしなみから外れた存在である女髪結や客を厳しく処罰したのです。

企画展示でこれを紹介したところ、「現代の日本には、〝ポテサラくらい自分で作ったらどうだおじさん〟がいるけど、江戸時代には、〝髪くらい自分で結ったらどうだおじさん〟が出没していた模様」などと書き込んだツイッターを見つけ、上手いなあと笑ってしまいました。しかし、いずれにしても職業からの女性の排除には、明確な理由はなかったのです。

江戸時代だけでなく、職業からの女性の排除には、しばしばこのような理由のはっきりしない排除や差別がみられます。数年

前、医学部の入試で女子受験生の合格点を男子より高くし、女子入学者数を抑えようとした大学が問題となったことがあります。その時、「大きな患者の身体を動かすのは男性医師のほうが向いている」と大学を擁護する意見を述べるTVのコメンテーターがいて、大変驚きました。一見合理的でもっともらしく聞こえますが、大きな患者を動かし移動させ看護する看護師に女性が多いことには触れない、根拠のない説明だからです。このような理由のない差別に、〝女性ならではの繊細さ〟とか〝優しさ〟といったフレーズが加わり、医師は男性、看護は女性という性別分担が長く続いてきたともいえるでしょう。

## 看病・介護は誰の仕事か？
### ―江戸時代の「看病断り」

では、看護や介護は、いつの時代も女性の役割だったのでしょうか。

江戸時代は、「忠孝」の道徳が大事にされた時代―親への「孝行」は、主君への「忠義」に勝るとも劣らない大切な義務でした。特に武士には「忠孝」が厳しく求められ、病や老いのために親の看病や介護が必要であれば、「看病断り」という休暇届―現代でいえば介護休暇の届を出し、親の看病・介護をする責任があったのです。主君は、届が出されれば、勤務を免除して休暇を与えました。

図2は、慶応四（一八六八）年三月、幕臣の酒井友之輔が、故郷の父の看病のために休暇を申請した際の申請書類で、「看病断り」の一つです。酒井は休暇を許されて帰国したようですが、なんとこの「看病断り」が出されたのは、戊辰戦争の最中、薩長軍による江戸城総攻撃が取沙汰されていた時期でした。このような時期にも、「看病断り」が許可されていたのは少々驚きですが、家長の責任と親への「孝行」はそれほど大切なものとされていたのです。

江戸時代後期には、庶民についても武士についても、幕府や大名が、孝行者や忠義に励んだ者を〝奇特者〟として表彰したり、「孝義録」という書物にまとめて広く紹介したりします。柳谷慶子氏の研究によれば、仙台藩の「仙台孝義録」では、男性一人で介護にあたる事例が、介護全体の五二・五％を占めているといいます。

このように、介護や看病は、忠孝の思想や女性へのジェンダー観念に依存し、その時代に特有のやり方で行われてきました。現代の日本では、介護や看病が女性の役割とされることが多いものの、近年は、家族の介護のために離職せざるを得ない男性も少なくありません。介護や看病は、儒教道徳やジェンダーによらず、社会全体で取り組むべき大切な人間の営みである――現代は、それがみえてきた時代ともいえるでしょう。

## 女性はコンピュータに弱い？

最後に、コンピュータ労働とジェンダーについても、簡単にご紹介しましょう。ごく最近まで、プログラマーやシステムエンジニアは男性というイメージがありました。しかし、これらの仕事への需要が高まり始めた頃には、そのようなイメージは薄かったのです。昭和四四（一九六九）年、通商産業省は、コンピュータにかかわる専門技術者の認定制度「情報処理技術者試験」を設けます。この試験の合格証書は、プログラマーなど、来るべき情報化時代の専門職として働くためのパスポートとみなされ、当初は、男女を問わず参入することが想定されていました。女子大や女子短期大学でも、この試験に合格しプログラマーとなるためのコースを設置するところがいくつも出てきました。一方で、コンピュータ関連業種のなかでも比較的単純労働であるキーパンチャーやオペレーターなどの職種は、次々に補充・代替される女性の職場とされ、プログラマーなどの情報処理技術職との間には、はっきりとジェンダー格差がありました。しかし、情報処理技術職種のなかでは、当初男女の差は想定されていなかったのです。

しかしその後、現実には、女性のプログラマーやシステムエンジニアは増えませんでした。コンピュータに合わせて働く長時間労働の一方で、社会的には家庭責任を女性のものとする意識が強く、女性が働き続けることが難しい職場となっていったからです。一方で、キーパンチャーなどの単純労働は女性に向く仕事とされ、ジェンダーによる職業の配置と賃金の格差が次第に固定化していきます。さらには、女性はコンピュータに弱いといった言説すら生まれていったのです。

## 歴史を知る意味とは？

仕事やくらしのなかのジェンダーは、さまざまな言説と絡まり合い、ジェンダーの抑圧や差別を生み出してきました。私たちは、その現実のなかで悩み、もがき、葛藤しながら生きています。しかし、日々の葛藤のなかで、少し遠くまで視線を延ばし、数百年の単位で延伸・俯瞰して歴史をみると、当たり前だと思っていた規範が絶対のものではないこともわかってきます。そして、私たちは、そのような歴史的変化の中で生きる一人の人間なのです。企画展示を見たある若い女性は、「私には、二〇〇〇年の御先祖様がついている」とSNSに書き込み、展示する私たちも大変勇気づけられました。

歴史は、私たちの抱える葛藤や矛盾の解決法を直接に教えてくれるものではありません。しかし、歴史は変わるし、変えられる。ジェンダーにとらわれず自分らしく生き、また、それが当たり前となるような社会を作っていく上で、歴史は、たくさんの気付きと希望を与えてくれるように思います。

図2　「御留守居支配勤仕並酒井友之輔儀為父看病御暇申渡候御届」
（国立公文書館蔵多聞櫓文書より）

# 小金井で働く

## 「ものづくりで、人と地域を繋ぐ」 やまさき 薫さん

JR中央線東小金井駅近くの高架下で「ヤマコヤ」を開くやまさき薫さんに、ものづくりへの想いや、これまでの活動について伺ってきました。

### ◆やまさき薫さんのこれまで

出身は鹿児島です。デザインをするには東京にいた方がいいという東京学芸大学（以下、「学芸大」）出身の恩師の勧めで、大学進学を機に上京しました。小金井市にはそのときから住んでいます。教育にも興味があったので、学芸大の教育学部美術科で小学校の教員免許を取得しました。

卒業後は元々したかったデザインのために、デザイン事務所に勤めましたが、働き始めて三年目に、事務所が解散しました。デザイン事務所での仕事は、夜まで長く仕事をするようなハードワークだったので、結婚や出産というタイミングが来たときに、この仕事は好きだけどこのまま続けることは難しいのではないかと思い、同じ職種への転職も考えましたが、そこでフリーランスになる決断をしました。

デザイン事務所での仕事を引き継ぎながら、自分の名前で仕事を始めました。フリーランスだと家で仕事ができてしまい、繋がりが増えないと思ったので、週に数回は編集事務所の手伝いをしていました。しかしメインは別であるので、そこではアイデア出しの業務には携わらないようにしていました。

デザイン事務所に勤めていたときから個展をカフェやギャラリーで開催していましたが、都心で開催していろんな人に見てもらうのもいいけれど、小金井にも来てもらいたいと思い、結婚・出産後、桜の時期に小金井で展示をしました。お散歩マップも作り、来てくれた人に渡しました。それが小金井を拠点に活動しだしたきっかけです。顔が見える範囲でやっていくことに広がりを感じました。楽しかったですし、自分の暮らしがより良くなる感じがしました。

東小金井駅高架下に、絵とデザインのアトリエ「ヤマコヤ」を開いたのは八年前です。展示会には自分の作品を好いてくれる人が来てくれていましたが、お店を開くといろんな人が来るのが面白かったです。

お店は私の仕事のショールームであり、雑貨販売だけで事業をやっていこうとは考えていません。お店を閉めているときは、お店をアトリエとして使うこともあります。お店は自分の作品を知ってもらったり、デザインを身近に感じてもらったりするための場で、トータルで仕事を考えています。

ちなみに夫は同じ学芸大の美術出身で、小学校の図工の先生をしています。私は自分の裁量で休めるので、その代わり土日のイベントのときは夫に子どもを見てもらっています。お互いに苦ではないので、できる方が子どもを見ます。私は学校外で、ものづくりを教えたいと思っているので、教育に関する情報交換もしています。

### ◆ものづくりと教育

ものづくりには大事な要素が詰まっています。言葉にできない自分がイメージしたものを具現化するためには、見通しを立てながらものを作っていく必要があります。ものをつくるとき、小学校に図工の先生がいるのは東京都だけです。図工の先生がいない授業では、キットを渡してあとは各自で作るだけという場合があります。しかし表現について自分の感情を味わえるように声掛けをすると、ものづくりは深まっていくと感じます。これもいいし、あれも面白いと声掛けをします。この分野には正解がありません。私は選択肢がたくさんあるということを伝えたいと思っています。私は小さい頃から絵を描くのが好きでしたが、絵描きでは食べていけないと思っていました。でも高校二年生のときに、「雑誌の絵を描いているのは誰？テレビのセットやお菓子のパッケージは誰が作っているの？」って気が付いたんです。そういう道もあるなら仕事にしていける気がしました。そういう風に選択肢がたくさんあることを知っておくのは大事です。選択肢を持っていて、そこから自分が決めることが

大切だと思います。自分で決めるとなったときに、選択肢がないと人は誤った基準で判断してしまうこともあるからです。

### ◆ワークショップについて

ものづくりには気付きが多いので、皆さんと一緒に、ものを作る時間を増やしたいと思っています。ものは誰かが作っていて、自分でも作れると知って欲しいのです。ワークショップではシルクスクリーンを主に用います。平らであれば何にでもプリントでき、生活に応用しやすいシルクスクリーンは、身近で日常の延長線上にあるものです。作ってすぐに使用できるところがいいです。自分で作ったものに対して誇らしく思ってほしいです。

子どもと大人がお互いに感化しあうように、テーブルは分けないようにしています。お互いがお互いに感化されるという場を作りたいんです。

コロナ禍でワークショップができない期間には、三カ月だけ小学校で図工の講師をしました。ワークショップでは十人くらいの人たちに時間をかけて伝えますが、小学校では大人数に一気に伝えないといけないというところが違います。また公立の小学校には、お店に来る人と同じで、いろんな背景の人がいます。ワークショップであれば興味がある人だけが来ますが、学校の授業ではそうではない。そういうところで、いろんな人の選択肢を広げるのもいいなと思うので、今後図工の講師もする機会があればいいなと思います。

### ◆今のライフスタイルを作り出せた理由

大事なのはやってみることで、一歩出せるかどうかの違いだと思います。大きい一歩だと動揺します。それよりも、小さい一歩を数多く出す。性格にもよると思いますが、私は刻んだ方がやりやすいです。自分はどうしたら心地よく過ごせるかを、よく考え、自分自身をよく知って、まずやるという繰り返しです。ものづくりでも到達したい方向を考えて、踏み込めるサイズにアクションを刻みます。

私は遠くに見えるものの繋ぎ役になりたいと思っています。こことここが繋がったらもっとワクワクしそうと思って声をかけたとき、より楽しいことができたり、人がはっと発見した顔を見たとき嬉しくなります。

### ◆今後してみたいこと

ここ数年、公教育の中で教えることに興味があります。背景関係なく出会えるからです。図工が好きな子以外にも、ものづくりを通した視野の広げ方を伝えて一緒に楽しみたいです。

高校生、大学生と一緒に活動するプロジェクトもしたいです。学生は、小さい子とも大人とも反応が違います。幼稚園や小学校低学年の子と、子ども店長のワークショップをしたことがあります。そのときは、子どもは子ども同士の共通言語を持っているということに学びがありました。小さい子たちに伝わる言葉をよく知っています。いろんな層の人たちと関わって一緒に何かすることには、そのような発見があります。

アートイベントやマルシェ以外にも、地域のイベントに関わる機会が増えるといいなと思っています。そういうイベントには、いろんな背景の人が集まります。梶野公園のお祭りにデザインで関わった際には、防災がテーマだったので、いつもとは違う層のコミュニティに入って交流することができました。年齢層が豊かでいろんな話を聞けて楽しかったです。

### ◆小金井市について

小金井市は、一言で言うと「ほどよい」です。都心に出ようと思えばすぐに出て行けるし、文化に触れて、刺激を得ることができますし、小金井市には公園や都市農家が多く、緑が多いので、その風景に落ち着きます。平野なので山が見えませんが、それ以外は故郷の鹿児島と同じ感覚です。季節の移ろいを肌で感じられます。個人商店もあれば大きなスーパーもあり、買い物をするところを、住んでいる人が選ぶことができます。町の規模感がちょうどいいです。特にお店をしていると、みんな繋がっていて、顔が見えます。

## 取材を終えて

お店を開くには大きな決断がいると思っていたのですが、やまさきさんのお話を聞いていると、そういう風には見えませんでした。それは選択肢がたくさんあることを知っているからなのだと思います。「そのことをみんなにも知って欲しい、みんなのものを作る時間を増やしたい、だってそれが楽しく好きだから」と話される様子はとても軽やかで、ものづくりを通して、こうしたら面白そう、どうやったらそれができるかなと考えていくことの豊かさを実感しました。（早崎）

## 令和４年 10 月１日施行

### 4 育児休業の分割取得

❶ 育児休業（新制度除く）を分割して2回まで取得可能とする。
❷ 保育所に入所できない等の理由により1歳以降に延長する場合について、開始日を柔軟化することで、各期間途中でも夫婦交代を可能（途中から取得可能）とする。

【これまで】
➡育児休業の分割取得は原則不可。特例として、子の出生後8週間以内に父親が育休取得した場合に、再度育休取得できる「パパ休暇制度」はあった。
➡1歳以降に育休を延長した場合の育休開始日が、各期間（1歳～1歳半、1歳半～2歳）の初日に限定されているため、各期間開始時点でしか夫婦交代できない。

### 5 男性の育児休業取得促進のための子の出生直後の時期における柔軟な育児休業の枠組み（産後パパ育休）の創設

❶ **対象期間、取得可能期間**
子の出生後８週間以内に４週間まで取得可能

❷ **申出期限**
原則休業の２週間前まで※

❸ **分割取得**
分割して２回取得可能

❹ **休業中の就業**
労働者の意に反したものとならないよう、労使協定を締結している場合に限り、労働者と事業主の合意した範囲内で、事前に調整した上で休業中に就業することを可能とする。

※ただし、職場環境の整備などについて、今回の制度見直しにより求められる義務を上回る取組の実施を労使協定で定めている場合は、１か月前までとしてよい。

## 令和５年４月１日施行

### 6 育児休業の取得の状況の公表の義務付け

従業員 1,000 人超の企業を対象に、育児休業の取得の状況について公表を義務付け。

【これまで】
➡子育てサポート企業の証である「プラチナくるみん」認定を受けた企業のみ公表。

# 育児・介護休業法が改正されました！

出産・育児による労働者の離職を防ぎ、希望に応じて男女とも仕事と育児を両立できることを目的に、「育児・介護休業法」が令和 3 年に大きく改正されました。男性の育児休業取得を後押しする施策が、令和４年４月から段階的に施行されます。

## 令和４年４月１日施行

### 1 育児休業を取得しやすい雇用環境整備の義務付け

❶ 新制度及び現行育児休業を取得しやすい雇用環境整備の措置を事業主に義務付け。
❷ 育休研修実施や相談窓口の設置など、具体的な措置は事業主が複数の選択肢から選択。

【これまで】
➡育休を取得しやすい環境整備に関する規定はなし。

### 2 妊娠・出産の申出をした労働者に対する個別の周知・意向確認の措置の義務付け

労働者又は配偶者が妊娠又は出産した旨等の申出をしたときに、当該労働者に対し新制度及び現行の育児休業制度等を周知するとともに、これらの制度の取得意向を確認するための措置を義務付け。

【これまで】
➡個別周知の努力義務のみ。「男性の子育て目的の休暇取得に関する調査研究（内閣府、2019年度）」では、育児等のための休暇・休業の取得に際し、男性では6割以上が企業からの働きかけがなかったとの回答あり。

### 3 有期雇用労働者の育児・介護休業取得要件の緩和

これまでの「引き続き雇用された期間が１年以上」という要件について、無期雇用労働者と同様の取扱い（労使協定の締結により除外可）とする。
※「1歳6か月までの間に契約が満了することが明らかでない」の要件は存置。

【これまで】
➡「引き続き雇用された期間が1年以上」、「1歳6か月までの間に契約が終了することが明らかでない」の2つの要件あり。

かたらい 2022 56号

## 「知っていますか？身近なDV」を作成しました。

DV防止啓発の一環として、DVやデートDVの特徴、チェックシート、相談先等を掲載した冊子**「知っていますか?身近なDV」**を作成しました。

本冊子は、市役所第二庁舎1階正面玄関のラックに配架しているほか、企画政策課男女共同参画室等でも配布しています。

また、市HPよりダウンロードができますので、ぜひご覧ください。

市HPはこちら

## 「性の多様性への理解促進講座」を開催しました。

本号でお話を伺った丸山まさよしさんを講師に迎え、2022年3月に、「性の多様性への理解促進講座」を開催しました。

2020年に開始した小金井市パートナーシップ宣誓制度の趣旨である、性の多様性への理解促進を目的として、昨年度に初めて実施しました。

「次世代に伝えていこう!性の多様性」を講座名として、基礎的な内容から、子どもたちに性の多様性をどう伝えていくかという問題を講師の丸山さんにお話しいただきました。

今年度は、2023年1月に開催を予定しています。多くの方のご参加をお待ちしております。

## 女性版骨太の方針 2022

**令和４年６月３日、❶女性の経済的自立、❷女性が尊厳と誇りを持って生きられる社会の実現、❸男性の家庭・地域社会における活躍、❹女性の登用目標達成、という４つの柱で成り立つ「女性版骨太の方針２０２２」が政府決定されました。**

**日本の男女共同参画の現状は、諸外国に比べて立ち遅れており、国が定める「第５次男女共同参画基本計画」を着実に実行するために、令和４年度及び５年度に重点的に取り組むべき事項として定められました。**

## 編集後記

今回は、「LGBTQ+」についての特集でしたが、生徒たちの方が進んでいると思いました。若い人たちが中心になって、子どもを含めて様々な性を認識だしているようです。日本史の髪形についての原稿も面白く拝見しました。今後も、少し歴史的なことも取り上げていくと面白いかと思います。

（佐藤 百合子）

人の数だけ様々な思いや考え方がある。他者とのちがいを通して、自分のことが見えてくる。みんなちがって、みんないい。そんな当たり前の大切さに気づかせてもらえたインタビューでした。

（秀澤 文子）

多様性に触れることは自分の視野を広げ、選択肢を増やすことに繋がるのだと勉強になりました。自分の中にある、あたりまえを疑うことが大切だと思いました。

（櫻井 愛）

今回が初参加でした。この先の自分の方がうまく書けるだろうと思うと、話してくれた方に今の私で申し訳ないという気持ちがしますが、初めてまとめたこのお話を私は忘れないと思います。

（早崎 沙彩）

寄稿や取材にご協力いただきました皆さまに、この場をお借りして御礼申し上げます。

（男女共同参画室）

「かたらい」は、公募による市民編集委員が、企画・取材・執筆を行っています。

小金井市男女共同参画情報誌「かたらい」第56号 2022（令和4）年9月発行／企画・編集：かたらい編集委員会
発行：小金井市企画財政部企画政策課男女共同参画室 TEL：042－387－9853 FAX：042－387－1224
編集委員：佐藤百合子 秀澤文子 櫻井愛 早崎沙彩 男女共同参画室／監修：高橋道子（東京学芸大学名誉教授）

古紙を配布しています。